第407回(582)　　＜読書会＞例会資料　　2024年6月22日（土）14時～16時

発表　中田裕子・朗読　松田有美子

みすず書房ロマン・ロラン全集第4巻『ジャン・クリストフ』　片山敏彦　訳

「九、燃え立つ茂み」

【124頁～148頁】

＊アンナが歌うのを聴く試みをクリストフはその後二度としないでいた。もしや幻滅を味わされはしないかと彼はおそれていた……それとも他の何事かをおそれていいた。それが何であるかは彼にも言えなかった。アンナも同じようなおそれを感じていた。

朗読①

翌日彼らはほとんど話し合わず、一種のおそれをもってたがいにそれとなく様子を見ていた。しかし晩にはやはり音楽をいっしょにした。やがてまもなく午後にもそうするようになり、日増しに、音楽を共にする時間が多くなった。　ブラウンはアンナが急に音楽に心酔したのにびっくりしたが、こんな女らしい気まぐれの理由をわざわざ穿鑿してみるだけ手間をかけようとも思わなかった。

人のいいブラウンが無遠慮なうちわけ話をするおかげで、クリストフはアンナの生涯の秘密を垣間見ることができた。　彼女はこの都市の生まれだった。父は百万長者の古い商家の子であり、この家系のなかでは、門閥の誇りと信心の厳格主義とが根強くはびこっていた。彼は、家族の立腹と反対を推し切って、市の近在の農家の娘と結婚した。　無節制といろいろの興奮とのために害われていた健康はひとたまりもなかった。彼は卒中のために死んだが、それは結婚して五か月後のことだった。　夫の死後四ヶ月して産褥熱のために死に、彼女は自分が見捨てて行く人生の岸辺に小さなアンナを遺して行った。　父親の母親は、息子のいまわの際にも、赦さなかったし、自分の嫁として承認したくない女も許さなかった。　彼女は子供を引き取って育てた。自分の息子の娘を、實の孫というよりむしろ、お慈悲から拾い上げてやった親なし子みたいに取り扱い、その代わりにこの子は女中がわりとして役立つ義務をもたされるはずである。

朗読②

或る日彼女は、身動きするたびに自分の肉体を刺す針の附いているコルセットを着用することを思いついてしばらくそれを実行した。彼女がわが身を責めさいなむのは、彼女が来世に期待する報酬のためではなかった。それは或る耐えがたい人生嫌悪のためであり、彼女はその気持ちを自分自身へ差し向けて、自分の身に苦痛を与えることの中にほとんど意地の悪い満足感を見出していた。祖母に似ているこの硬い冷たい精神が音楽に感じやすいことだった。どれだけ深く音楽を感じるかは彼女自身に自覚はないのだった。　自分の好きな人々との交わりの中で彼女は落ち着いた美的判断を楽しむよりも以上に、はるかに多く暗々裏の欲情の棘に心を刺されるのだった。彼女は自分自身の美しさも気づかないし、また自分が心の奥へ押し込めている諸本能の強さにも気づかなかった。いや、むしろ、それに気づくまいとしていた。自分の心を嘘によって言いくるめる習慣に馴れていた。　ブラウンが初めて彼女に会ったのは或る結婚式の披露宴においてだった。彼は隣席の女性の心の、けがれのない無邪気さを感銘したのだった。彼はアンナの祖母を訪問し、二度目の訪問のときに結婚を申し込んで同意を得た。結婚してからの七年間、夫妻の和合は何ものにも曇らされなかった。互いに理解し合わず、そのことに少しも不安は感じないで二人はいっしょに暮してきた。世間の眼から見れば模範的な夫婦であった。

＊数週間以来アンナは悩んでいるような風だった。顔が痩せた。彼女の元気がなくなるわけは、町の外へ出ることもなく、外出さえほとんどせずにとじこもってばかりいる暮らし方にあるのだろうとブラウンは判断した。とうとう強制的に、郊外へ一日の遠足を妻にさせた。ドクトルはいざ出発という間際になって急を要する容態の病人のために引き留められてしまった。クリストフがアンナといっしょに出かけた。彼らの乗った箱は満員であった。アンナの様子は憂鬱であった。彼女の目の前の座席へじっと眼を見据えていた。その顔色は蒼ざめていた……彼らは汽車を降りた。彼らはならんで歩いた。少しずつ彼女の顔つきが活気づいてきた。足早の歩行が、彼女の蒼ざめていた頬に赤らみをさし昇らせた。螺旋状に登る径の曲がり角で、彼女は一匹の山羊みたいに坂を直線的に攀じ登りはじめた。顔つきは輝き、口は開いて、大きく呼吸していた。彼女は森の中へ駆け込んだ。叫び声と笑い声とを挙げた。クリストフは彼女のうちに宿っている力強さ、そして彼女が日常生活の中では少しも使わないでいるその力強さにおどろき呆れた。彼らは次の村まで歩いたが、彼女は干からびている麦の切り株を、身を軽く踏みつけて歩き、踏まれた切り株は足の下で弾きかえした。宿屋の食堂に入ってテーブルの前に腰をおろした。アンナは大いに食欲を示したが、それはクリストフがアンナにおいてついぞ見知らぬことだった。食後、二人は仲良し遊び友達みたいな様子で再び野道をあるいた。血のめぐりがいいための爽快さと、吹きつける風の快さだけに占められていた。アンナの舌はほ

ぐれた。思いつくまま何でも話した。子ども時代のこと、住んでいた家について、小娘のころの手柄話。彼らは相手の手により大きい痛みを与える競争をした。すっかり無邪気な興味の中に溶け込んで幸福だった。他のすべてのこと、彼らの生活のいろいろな束縛、過去の悲しみのかずかず、将来への懸念、彼らのうちに増しつつある情熱の嵐――それらすべてが念頭から消えうせていた。突然アンナは立ちどまって、地面の上に身を投げ出し、麦の刈り株の上に寝そべって、もう何も言わなかった。

朗読③

彼はアンナに手を差しのべた。彼女は一言も言わずにそれを取った。彼らは村へ戻る道をあるいた。少し遠いところからクラリネットとホルンとの鼻声じみた音が聞こえた。村の広場で人々はダンスをしていた。アンナとクリストフは宿屋の前の椅子に腰をおろして、踊っている人々を眺めた。ほかの時だったらアンナはこんな粗野なお祭り騒ぎの気分を嫌に感じたことだろう。しかしこの夕方にはこれが彼女には楽しかった。　アンナはダンスの輪のなかへ飛び込んでいった。手当たりしだいに彼女は二つの手をつかんで、気が狂ったように激しく旋回した。べっこう細工の留め針が彼女の髪から抜け落ちて飛んだ。クリストフはアンナを見つめていた。

朗読（中田）

きらきらと星が光り、氷のように冷たい星の下に再び彼らは二人きりになって、午前に通った同じ野道を歩いた。彼らは駅へ近づいた。人家のところまで来る一歩手前のところでクリストフは立ち停まってアンナをみた。彼女もクリストフを見、そしてさびしく微笑した。

朗読（中田）

＊数日後、午後の４時ごろに彼らだけでいっしょに居た。ブラウンは外出していた。彼らがいっしょに入たのは客間のなかだった。彼らは無言であった。クリストフは本読んでいた。アンナは編み物をしていた。彼はアンナに背をむけていた。アンナは彼をみなかった。彼女は手仕事に熱中していた。だが、一つのおののきが彼女の全身を流れて、何度も針で指を刺した。しかし、それに少しも気づかなかった。

朗読④

ブラウンが帰ってきた。彼らは食卓についた。夕食が済むとまもなくアンナは自分の室にはいった。ブラウンと二人だけではじっと座っていられない気もちのクリストフも自分の室へしりぞいた。　もう寝床についていたドクトルは真夜中ごろに往診に呼ばれた。彼が階段を降りて家から出かけて行くのをクリストフはきいていた。クリストフは眠らなかった。

朗読⑤

昼の食事のときに彼らは再び顔を合わせた。ブラウンは昼間じゅう家を外にしていた。彼はアンナに話しかけたかった。しかしそこに居るのは二人きりではなく、女中が行ったり来たりしていた。彼らは用心しなければならなかった。

朗読⑥

クリストフは旅に出るのだという口実を設けて半月ほど町から姿を消した。

アンナは丸一週間、食事の時間以外は、自分の室に閉じこもっていた。彼女の良心と、彼女の習慣と、過去の全部の生活――それから解放されたと彼女は思い込んだが、しかし、決して解放されてはいないその生活が再び彼女をつかんだ。　神は敵であった。神の叱責を聴かないふりをしていた。彼女はそれをどうしても聞かないではいられなかった。彼女は、歯を食いしばり、額に頑固な縦皺を一本寄せ、硬い目つきをして「神」を相手に強固に談判した。アンナは憎しみをもってクリストフを思った。彼女は魂の牢獄から一瞬間だけクリストフが引き出しておいて、再び彼女がその牢獄の中へ陥って苛責の餌食になっているのをクリストフがそのままにしていることをアンナはクリストフに赦さなかった。彼女の心を責めさいなむ同じ考えを、彼女は昼も夜も繰り返した。彼女は機械のように正確に、いろいろの勤めを実行していた。彼女は次第に痩せた。彼女は、ブラウンに対する良心の苛責を強く感じるにつれてますます不愛想な様子をブラウンに示した。

クリストフは再びその家へは戻るまいと決意していた。彼は疲れ切るまで自分の身体を酷使した。何をしてみても火を消すことはできなかった。昼も夜も回想の中から情欲の棘が彼をつついていらだたせた。脱却しようともがきながら脱却することができず、その努力に力つきていた。結局元の位置へ戻ってしまっているのだった。そして彼は風に向かって叫んだ。――
「さあ、ひと思いに僕を打ちくだけ！いったい僕をどうしようというのだ？」

朗読⑦